

「Irritable Bowel Syndrome」

(IBS: 過敏性腸症候群)

旭川医科大学教授 並 木 正 義
弘前大学 教授 川 上 澄 著
九州大学 教授 中 川 哲 也

北里大学教授

岡 部 治 弥

本邦の過敏性(大)腸症候群研究の歴史における、草分けとも言うべき3人の分担執筆になる共著である。A5判132頁の著書であり、休みの1日ゆっくり読ませてもらったが、その内容は極めて濃く、本症候群については理解しているつもりであった私にとっても、大変勉強になった。著者の3人は、人も知る心身医学に造詣の深い方たちであり、また、併せて消化器疾患と心身医学の相関に特に関心の深い方々である。したがって、心身医学的面からの分析が極めて細やかであり、全体として教わる所が多いと言える。序文によると、本症候群の存在が本邦において注目されるようになったのは、1967年名古屋における第53回日本消化器病学会総会で過敏性大腸症候群というテーマのシンポジウム(司会: 松永教授)が初めて取り上げられたのが、きっかけであり、その折のシンポジストが、3人の本著者方であった由であるが、以来、わずかに16

年の間に、本症の概念は消化器病学の分野において欠くことのできないものとなっており、現在消化器病学に関心を持つ医師で、これを知らぬ者はないほどまでに一般化し、かつ診断名として頻用されているものである。

さて、本書の内容は、大きく総論、診断、治療の3部に分けられ、総論については並木、診断については川上、治療については中川の3教授がそれぞれ執筆されている。

総論においては、本症を示唆する病名や初めて文献に現れた時代から、本症の疾患概念が現在の状態に変遷してくるまでの歴史、病態生理、次いで成因、臨床像などが記述されているが、この歴史的変遷に関する記述は、多くの文献を渉猟しており、概念の変遷がよくうかがえて興味津々たるものがある。

診断の項では、消化器専門医でもある川上教授は、X線学的特徴像を示すと共に、この機能異常の原因把

握のための、心身医学的アプローチの諸アンケート、更に自律神経緊張異常の検索法と記述をすすめ、加えて本症と鑑別診断すべき疾患を示している。

治療については、心身医学が専門である中川教授は、根本方針を述べたあと、極めて広汎にわたる治療の内容(主として心身医学的)について詳述している。

最後に、それぞれ3人の著者が5例ずつ、計15例の自験例について呈示しているが、その症例に対する分析と解釈に、それぞれ三人三様の特徴がうかがわれて、これも興味深いところである。

最後に本書を熟読することによって、現在ICSからIBSとされている病態、その成り立ちは、精神情緒、性格面において決して単純なものでなく、多岐にわたるものであり、心身医学的治療法によっても、かなり難治例のあることが理解され、その多彩性が強く印象づけられるであろう。疾病は、その多くが大なり小なり心身両面におけるひずみを持つものであり、その治療に当たっては、心身両面からのアプローチが不可欠であることを十分認識するためにも、多くの実地医家や、今から臨床医家たらんとする方々に一読をおすすめる。

A5判 132頁 図56 表9

定価 3,000(送料 250円)

新興医学出版社 刊